時評

アンソロジーの魅力

黒岩剛仁

二月号でも、アンソロジー『老いて歌おう』を取り上げたが、昨春以来の新型コロナウイルス禍の状況にあっては、常にも増してアンソロジーが胸に沁みる。日本歌人クラブが毎年発行している『現代万葉集』２０２０年版にもそれを感じた。

・直ぐそこに青き湖あるごとし雨後の路面は深呼吸する
今井　恵子

・ゆうぐれに烏がひとつみずからを畑より空へ押しあげてゆく
・盛大に雪を散らして天晴なり朝朝のひよどりの小競り合い
齋藤　芳生

・雪ぐもりの空には誰の声もせず声のようなる雪がふるなり

「自然」の章より。何気ない自然詠だが、いいな、と思う。雨上がりに深呼吸する路面、畑から自分の体を空へと押し上げる烏。雪を散らして小競り合いを繰り広げる鵯を天晴と言い、誰の声もしない中、声のような雪が降ると詠む感性。

・アメリカの映画みたいな夢の後尾張名古屋の渋滞にいる
小塩　卓哉

・一晩中起きているのかコホンとう咳聞こえたり娘の部屋に
・ゴールデンウイークらしき夕飯に令和の赤飯シウマイ弁当
黒岩　剛仁

・定期券期限来たれば考えて三か月だけ延長したり

「生活」の章から引いた同世代の二首ずつである。それぞれ詠み口の違いは味わえるのではないか。アメリカ映画のような夢と渋滞との取り合わせと、年頃の娘への気遣い。拙作では、〈令和〉への改元と定年が近づいたことの感慨を詠んだ。

・「天井桟敷」の男優女優も素の顔に乗り来る「晴海埠頭」行きバス
鈴木　英子

・バスに乗る日はあっただろうかこの道を寺山修司は確かに通いき
・前の女（ひと）の掲ぐるスマホの画面にて吉田神社の鬼を捉へる
服部　崇

・なやらひの鬼はやつぱり退散すここから先はひとに押されて

これらも同じ「芸術・文化・宗教」の章から引いたが、その抱く関心の違いが面白い。片や寺山修司、片や京都の吉田神社の鬼。

・わたりゆく鳥の心よ　心あれど犬は自分の旅には出ない
佐佐木幸綱

・レトリバーと生（あ）れたるからに人間の靴を咥えて悠然と来る
・平成の半ば十年をきみ病みてきみ逝きてきみを憶ふ十年
永田　和宏

・ここにあらぬ人の影のみ濃く顕たせ夕日のなかの椅子さびしけれ
・先生に従ひゆきて、星座図を買ひてもらひき　敗残の日に
岡野　弘彦

・杖引きて　桜の山をのぼるなり。おもかげに顕つ、なべて亡き人

それぞれ、「動物」「家族」「戦争」の章より。アンソロジーには、このような読み比べの醍醐味もある。